

# 粒子時代のがんと暮らし・生活ニーズ調査報告

## <おひとり様のがんの厳しい経済困窮、男性がんの『孤立化』が明らかに>

サバイバーシップの啓発、普及を目指す NPO 法人 HOPE プロジェクト (理事長: 桜井なおみ) は、「核家族時代」から更に個別化が進んだ「粒子家族時代のがんと暮らし・生活ニーズ調査」を実施、結果をまとめた。

### ●がんはおひとり様の生活を直撃。おひとり様の約7割が平均所得金額以下、4人に1人が年収半減。 預貯金を治療費などに補てんする「切り崩し型」生活を続けている状態。

- ・おひとり様の約5割(45%)は年収300万円未満の低所得者層。'平均所得金額(548万2千円)以下'も約7割(72%)を占める。(参考:「2012年国民生活基礎調査」厚生労働省)。
- ・4人に1人のおひとり様が罹患後に年収半減。約7割が「生活への負担が大きい」と答える。
- ・おひとり様男性の約3割は民間保険に未加入の状態での罹患、約7割は預貯金を治療費に補てんする「切り崩し型」生活を続けている現状。おひとり様にとって「金の切れ目は命の切れ目」。

### ●女性のがんは外向的、男性のがんは内向的。男性には積極的な(おせっかいな)介入が必要。

- ・おひとり様の約8割(60人)は1人でがん告知、約3割(20人)が相談相手がない。
- ・男性がん経験者は、配偶者以外には、不安や悩みを「誰にも相談しない」傾向が顕著である。
- ・必要なサービスとして女性は「話相手・ピアサポート」が上位に挙がるが、男性は「宅配の食事サービス」など自分への直接的な支援ニーズが高く、周囲との関係づくりに非積極的。

### ●粒子家族時代の不安は、<End-of-life Care>における「担い手・居場所の不在」

- ・おひとり様は、自宅での療養生活を望みつつ、ホスピスで最期を迎えることを想定。今後の不安材料には、「自分の命」より「お金」が大きく、経済的な不安は長期化傾向。
- ・自由回答からは、体力低下時の生活や死後の財産管理などの「担い手・居場所の不在」。粒子家族時代の<End-of-life care>に対する不安は大きい。

#### 【私たちからの提言】

我が国における晩婚化・生涯未婚率の変化を鑑みれば、今後、夫婦間や家族のあり方は大きな変化が生じる。特に、おひとり様のがん患者は、更なる増加が推測される。

そこで私たちは、以下3つのサービスの必要性を提案し、診断時からの中長期的な社会・生活支援となる「サバイバーシップ・ケア・プラン」のより一層の充実を推進したい。

- 所得や収入の変化に応じた高額療養費制度の柔軟化、税の減免措置、介護認定の迅速化、成年後見制度の拡大など、おひとり様の生活を支える施策、サービス、情報の拡充
- 匿名性が担保できる電話相談などを含めた様々なピアサポートの充実、語り合う場の創出。相談支援センターの周知徹底。
- ACP (Advanced Cancer Care Planning : 体調悪化に向けて、今後の治療や療養について考えること) を共有、継承する機会の確保